

事業実績

I 資源生態調査

1. 浮魚資源調査

東海区水産研究所の委託により境港に陸揚げされたアジ、サバ、マイワシ、ウルメイワシ、カタクチイワシ及びスルメイカについて日本海区水産研究所の作成した調査要綱に従い調査を実施した。成果の概要は次のとおりである。

(1) 銘柄別漁獲量調査

イ 漁獲量

まき網(トン)

漁具の規模	延出漁統数	総漁獲量	かたくち	まいわし	うるめ	さば	あじ	その他
大・中型	2331 (2323)	132396 (157,563)	1,933 (2,128)	40,559 (38,379)	6,046 (5,940)	80,953 (107,726)	792 (1,276)	2,113 (2,114)
小型	1,553 (1,548)	30,136 (30,011)	3,104 (4,131)	20,022 (19,009)	1,881 (1,814)	3,164 (3,094)	597 (597)	1,368 (1,366)
合計	3,884 (3,871)	162,532 (187,574)	5,037 (6,259)	60,581 (57,388)	7,927 (7,754)	84,117 (110,820)	1,389 (1,873)	3,481 (3,480)

スルメイカ釣(トン)

業種	延航海数	総漁獲量	航海当り漁獲量	備考
生船	1,750 (1,940)	7,070 (7,653)	40 (39)	
船内凍結船	349 (346)	4,111 (4,220)	118 (122)	
合計	2,099 (2,286)	11,181 (11,873)	53 (52)	

注) ()内は52年1月～12月の集計

()外は52年4月～53年3月の集計

ロ 魚種別銘柄別漁獲比率

()内は52年1月～12月の集計
()外は52年4月～53年3月の集計

銘柄	魚種				
	かたくち	まいわし	うるめ	さば	あじ
大	13% (1)	()	4% (4)	()	5% (4)
中	74% (88)	100% (84)	75% (75)	7% (7)	34% (33)
小	13% (11)	(16)	21% (21)	33% (33)	33% (37)
極小	()	()	()	60% (60)	28% (26)

(2) 体長組成調査および精密調査

測定の実績は次のとおりである。

	かたくち		まいわし		うるめ		さば		あじ		するめいか	
	回	尾										
体長組成	1	49	16	2,120	13	1,552	16	3,292	3	526	21	1,327
精密	1	30	16	500	14	596	16	500	3	100	11	364

2. 以東底魚資源調査

水産庁の委託により、日本海西部における底魚資源の実態を明らかにするため、第1鳥取丸により底びき網を使って次の調査を行った。

(1) ズワイガニ標識放流

隠岐島西方の847・848及び859漁区において10月12日より28日までの間にズワイガニ2,162尾に標識をつけて放流したが、53年2月末までに61尾(うち49年に放流したものの3尾、50年2尾、51年16尾、52年40尾)の再捕があった。

(2) 魚類の分布調査

52年11月より3月までの間に3航海の調査を行い、837・838・846及び847漁区において、28回曳網して水深198～410mにおけ魚類の分布調査を行った。結果の詳細は日本海区水産研究所へ提出した。

3. 沿岸重要資源調査

目的

栽培漁業の展開を目標として種苗放流に関する基礎資料を得るため、本県の沿岸重要資源であるヒラメ・カレイ類の生態生活史の基本的な調査を行う。

方法

試験船により砂丘沖を主体に小型底曳網を曳網し、ヒラメ・カレイ類の移動回遊調査としてタグガンによる標識放流を実施した。また生物調査としてメイタガレイを市場購入し魚体測定と精密調査を実施した。

結果

標識放流は合計195尾（ヒラメ116尾、メイタガレイ64尾、イシガレイ10尾、ムジガレイ3尾、メゴチ2尾）であり、再捕尾数は昭和53年3月末日現在で、ヒラメ19尾、メイタガレイ3尾であった。最大経過日数はヒラメで142日、メイタガレイで16日でいずれも北西方向沖奇り移動であった。

これらの詳細は生物調査と併せて後日報告の予定である。

4. 200カイリ水域内漁業資源調査

水産庁の委託により、我が国200カイリ漁業水域の設定に伴い当該水域内における漁業資源を科学的根拠に基づいて評価し、漁獲許容量等の推計に必要な資料を整備した。

(1) 生物測定調査

サバ、アジ、マイワシ、カタクチイワシ、ベニズワイ、スルメイカの6魚種について体長組成及び体長、体重の測定を行った。

測定の実績は次のとおりである。

	さば		あじ		まいわし		かたくち		べにずわい		スルメイカ	
体長組成	回 17	尾 3,182	5	714	22	2,582	13	1,569	1	210	0	
体長・体重	16	842	3	150	25	1,321	17	827	0		3	147

(2) 標本船調査

大中型まき網1・中型まき網2・スルメイカ釣1隻を標本船にえらび操業実態細目調査表の記入を依頼した。

Ⅱ 漁 場 環 調 査

1. 沖合漁海況調査

目 的 : 沿岸・沖合漁業に関する漁況及び海況を調査研究し、その結果に基づいて作成された情報を迅速に普及広報し漁業経営の安定を図る。

方 法 : 県内及び近県の漁況の情報を収集し、これらの資料を整理分析して旬ごとに漁海況速報を作成し関係機関に配布した。

結 果 : 海況は4月～7月上旬まで沖合からの冷水域が強く張り出し水温を底めに経過した。夏期に入って7月中旬の高気温の影響を受け水温は高めであったが、9月にはふたたび底めとなった。秋期に入って10月には水温はほぼ平年並であったが11月には高めに経過し、冬期も高めに経過した。

漁況は春期にサバ、マイワシの豊漁がみられ、7月まで好漁獲がつづいた。しかし、8月より夏枯期に入り、秋期にも漁況は極めて低調であった。12月に入りサバ越冬魚群が大量に来遊し漁況は極めて好調であり、つづいて1～2月もサバ主体に順調な水揚が認められた。

巾着網漁業で漁獲された各魚種の昭和52年1月～52年12月までの漁獲量は大・中型巾着網がサバ107,726トン(69%)、マイワシ38,379トン(24%)、ウルメ5,940トン(4%)、カタクチ2,128トン(1%)、アジ1,276トン、その他2,114トンの計157,563トンで、小型巾着網がマイワシ19,009トン(63%)、カタクチ4,131トン(14%)、サバ3,094トン(10%)、ウルメ1,814トン(6%)、アジ597トン(2%)、その他1,366トン(5%)の計30,011トンで総計187,574トンであり昭和51年を上廻って史上最高の漁獲量を示し漁況は極めて好調であった。

スルメイカ漁業は5～6月には漁況は極めて低調であったが7月～9月ではやや好調に経過した。しかし、秋期～冬期には漁況はふたたび低調であった。

境港において昭和52年1月～52年12月の1年間に水揚されたスルメイカ漁獲量は生船が7,653トン、冷凍船4,220トンの合計12,036トンを漁獲したが、この水揚量は昭和45年以降では最低であった。本年の日本海におけるスルメイカ資源は春イカ系群の資源が増加したが、秋イカ系群の資源量が減少し、また、冬生れ系群も資源量が極めて少なかったためスルメイカ漁況は低調に経過した。

2. 沿岸漁海況調査

目的： 海況及び漁況の変化、変動を把握し、沿岸漁業資源の合理的利用と操業の効率化を図る。

方法： 沿岸海洋観測（水深100m以浅、11定点）を実施し、また、県内、県外から漁況、海況の情報を収集し、それに基づいて漁海況旬報を作成し関係機関へ配布する。

結果

海況： 水温は昨年と比べると4月から7月までは、昨年並みに推移していたが、7月～8月に急激に昇温傾向を示し、8月～10月は昨年より高めに推移した。また平年と比べると7月までは平年並みかやや低め、8月～10月は平年並かやや高めに推移した。

漁況： シロイカは9月以降に、シイラは8月中旬以降に好漁を示し、昨年を上回る漁獲量であった。スルメイカ、トビウオは低調な漁況で推移し、特にトビウオは不漁であった。メデイカは今年も漁獲がみられなかったが、ヨコワは10月以降漁獲がみられ好漁であった。

各地区の主な魚種の年度別漁獲量

魚種	地区	年度		52		51		50	
		漁獲量	漁獲量	総漁獲量	1隻当り漁獲量	総漁獲量	1隻当り漁獲量	総漁獲量	1隻当り漁獲量
シロイカ	網代	(kg)	(kg)	(kg)	(kg)	(kg)	(kg)	(kg)	(kg)
	泊	19,767	5	25,716	11	14,184	9	19,304	8
	赤碓	109,017	36	75,488	28	44,850	24	7,772	7
シイラ	網代	31,994	711	16,953	423	28,510	361	36,195	169
	泊	36,195	169	23,185	122	38,377	187	9,220	415
	赤碓	9,220	415	53,537	283	130,572	520		
トビウオ	泊	13,168	151	53,742	333	34,057	226	120,186	448
	赤碓	120,186	448	211,701	878	130,559	619		
ハマチ	泊	37,726	57	8,397	15	75,145	125	33,441	130
	赤碓	33,441	130	14,606	84	131,420	267		
スルメイカ (沿岸)	網代	588,609	116	571,973	141	394,449	139		

3. 餌料生物調査

目 的

種苗放流適地に関する基礎資料を得るため、稚仔魚の減耗の主因と考えられる餌料生物（アミ、エビ類等の底生プランクトン及びペントス）の時期的分布を調査する。

方 法

本年度はペントス、特に多毛類の分布について、スミスマッキンタイヤ採泥器により賀露沖より砂丘沖にかけ定線を5本設定し、水深5、10、15、20、30、50mの各点を採泥、1mmふるいにて仕分け調査に供した。

結 果

本県砂浜浅海域のペントスについて、夏季分布の概略を述べると次の様である。

- 1) 優占種としてSpionidae科Prionospio sp., Cirratulida科Chaetozone sp., Capitellida科Mediomastus sp.があげられ、その分布水深は10～20m域が中心である。
- 2) 多毛類は5m域には分布量が以深域に比べ少く、10～20m域に分布の中心がある。
- 3) 定線別にみると千代川河口付近が最も密度が高く、予想された分布を示したが、河口中心線以北にとった定線では分布が少く予想を空ずれた。

以上の様な分布を示したが、詳細は後報告書にて報告する。

4. 組織的調査研究活動推進事業

52年6月15日活動チーム（水試4人、水産課4人）全員で活動地域として漁場整備中の気高町を第1回調査地に選定した。8月25日調査項目の討議を行ない

- | | |
|------------------|-----|
| 1 現行漁業把握とその展望 | 水 試 |
| 2 漁場管理（行使、制限）の展望 | 水産課 |
| 3 漁業経営実態把握とその展望 | 〃 |

と定めた。

9月13日にチーム全員の知見の整理を行った。

12月13日標本抽出を漁業種類別、漁船規模別を考慮した $\frac{1}{5}$ （20体）とし、調査表を作成し1：1の聞取り調査を行なう旨申し合せた。

1月17日に調査表の作成を修了した。

2月9日に調査を実施した。

調査結果をまとめ、問題点を出して次年度により詳しい調査を行なうように話し合い一応、水産課長に説明した。

Ⅲ 漁 場 開 発 試 験 調 査

1. 漁業試験

(1) スルメイカ漁業試験

目 的 : 日本海沖合におけるスルメイカの資源・漁場形成分布・生態などの変動機構を調査し、沖合スルメイカ漁業の安定をはかる。

方 法 : 試験船第1鳥取丸により、日本海中・西部沖合のスルメイカ漁場において、海況調査、漁獲調査、資源調査などを実施した。

結 果 : 昭和52年度の調査は5月27日～9月4日にかけて北緯40度以南の我国の200海里内において調査を行った。調査期間中に7航海を行い総漁獲量はスルメイカ11,108尾、水揚げ金額は1,081,940円であり、1航海当り平均漁獲量は1,539尾、平均水揚金額が154,562円、1尾当りの単価は97円であった。

本年、夏期の日本海沖合の海況と漁況についてみると、対馬暖流が大和堆海域より沿海州海域に向って強く北上し、漁場は沖合化して沿海州沖合に好漁場が形成されたため、我国の調査船がソ連・北鮮の200海里内に入域できず、日本の200海里内での資源状態は極めて低調であり漁獲成績は極めて不振であった。また、魚価は昨年を上廻ったが水揚金額は最低であった。

(2) まき網漁場調査

目 的 : 隠岐堆、大和堆付近の魚群の探索と海洋環境の解明を行ない夏期この海域に來遊する魚群の調査を行ってまき網漁船の沖合化をはかる。

方 法 : 日本海中・西部沖合の浮魚資源の調査を魚群探知機を使用して行ない、まき網漁場の開発を実施した。

結 果 : 調査は試験船第1鳥取丸により、スルメイカ漁業試験及び海洋観測実施中沖合漁場において行ない、沖合漁場で魚群探知機に記録された魚種はマイワシ、サバ、ウマズラハギ等が主な魚種であったが、特にウマズラハギの反応が多かった。夏期の中・西部日本海沖合では極前線海域でサバ、中・小羽マイワシの反応が出現し、対馬暖流域内ではウマズラハギ・小羽マイワシの反応が認められた。

調査の結果は沖合では漁業無線によって直接まき網漁船に通報し、帰港後は資料をとりまとめまき網組合より各関係業者に報告した。

2. 底魚漁場調査

試験船第1鳥取丸により1そうびき底びき網を使ってのべ17航海の調査を行った。849及び859漁区における調査結果は次表のとおりである。(以東底魚資源調査による試験結果も加算した)

底びき網漁獲物組成 (1曳網当り漁獲量kg)

魚種 年度	そう はち	あか がれい	ひれ ぐろ	まだら	すけ そう	北国あ かえび	その他 のえび	はた はた	ずわい る	ずわい ♀	その他	計
42	14.0	154	1567	0.8	0.2	1.2	1.1	166	345	243	106	2754
50	3.1	122	249	1.1	9.0	18.3	8.2	966	258	161	220	2393
51	2.3	146	392	4.6	1.5	9.3	7.7	3.1	120	9.3	162	1198
52	4.4	22	1267	0	0	5.6	5.6	5.6	67	167	122	1856

1曳網当りの漁獲量は前年の155%であるが、42年に比べると67.5%、50年の711%であって減少傾向がみられる。前年に著しい減少がみられたハタハタは、幾分回復したものの42～50年に比べるとまだ低い水準にある。一方、ひれぐろの漁獲が増加しているのが本年の特徴であった。

3. 中層浮魚礁集魚試験

目的： 砂浜海域におけるハマチ・ヨコワなど回遊魚のい集をはかるため、中層浮魚礁の集魚効果を検討し浮魚礁漁業の生産形態を究明する。

方法： 鳥取県岩美郡岩美町羽尾沖巨岸2km水深60mの地点に設置した。浮魚礁は径6m長さ23mのチェーン型のもの1基を作成し海面下15mに敷設した。

結果

(1) 浮き沈みの概略計算

各部分にかかる力を使用資材から計算したが微少なものは除外した。

- (a) 耐圧ブイとフレームとの関係では450kgの上向き力であり、従って魚礁となるフレームはブイにより上方へ力を受けて引張られる。
- (b) 耐圧ブイ・フレームとアンカー(コンクリート)との関係では2,550kgの下向き力であり、従って耐圧ブイ・フレームの系は浮き上ることなくアンカー(コンクリート)で海底に底着される。

(2) い集及び釣獲試験結果

昭和52年6月9日敷設後11回の潜水、魚探探査、曳網釣を実施した。い集魚種はカタクチ、マイワン、ウルメ、マアジ、ヨコワ、イシダイ、カワハギ、ウスバハギ、ウマヅラハギである。

IV 増養殖技術開発試験

1. 磯場造成試験

アワビ、サザエを中心とした磯根資源の増産を図るため、造礁域における人工種苗放流に伴う管理技術を確立する。

(1) 漁場評価調査

岩美町網代地先、泊村小浜～宇谷地先について藻類を中心とした枠取調査を実施した。網代地先については、52年度は、51年度に比べて湿重量が少なかったが、これは51年度は5月28日採集でモク類の一部の上部流失がみられたが、52年度6月23日採集でほとんどのモク類の上部の葉が流失しており、5月末より6月末にかけてモク類の流失期にあたったためと考えられる。

(2) 種苗放流追跡調査

当场において生産したSL20～25mmの稚貝3,000個を網代おぐら前の独立潜礁に放流し、継続調査中である。

2. 藻類種苗生産技術試験

沿岸岩礁域における藻類の増殖への展開を図るため褐藻類を主体とした種苗生産技術を確立する。

(1) モク類

5月初旬に岩美町網代地先の藻体を用いて採苗を試みた。ヤツマタモク、フンスジモク、アカモク、オオバモク及びホンダワラの各種を30ℓの容器に各々を入れ、胞子が熟して落ちるのを観察した。しかしこの方法では、短時間に胞子を大量に保ることは難しいようである。

(2) クロメ

11月初旬に岩美町網代地先で採集した藻体を用いて採苗を試みた。方法はワカメの採苗方法を準用した。母藻は根を切り取り数時間陰干した後水槽に入れ、槽底に採苗枠を敷いて胞子を放出させた。翌年1月数mmに芽出した藻体を枠ごと水面下3～5mのフィールドにつり下げ、4月初旬φ16m/mのロープに種糸を巻きつけ水深15m、水面下10～12mに設置した。その

後観察中である。

3. 砂浜生物放流技術開発試験(ばい)

赤碓沖実験漁場に於いて昭和50、51年に種苗放流した稚貝について、一年後の殻高調査から判断すると、赤碓沖の1年貝の出現比率が他の海域に比較して高く0年貝から1年貝についての詳細な調査が今後必要であるが、質的な効果はあると判断された。

赤碓、美保湾、東部砂浜域の系群間の交流について数理統計的な面を加味した調査でも交流のない事がわかった。

又、各種調査を総合的に判断して資源量、成長等についての知見を得た。

標本漁船からは赤碓沖について、水深とバイ生息範囲については特に高密度の水深はなく、10～30mに平均に分配している事がわかった。

詳細は指定研究報告に記してある。

4. 稚魚育成漁場造成試験

浅海砂浜域における幼稚付類の保護培養化を図るため、水深15～20m海域において、構築物による造成方途を検討した。

(1) 試験場所及び施設

別 表

(2) 施設安定

造礁目標としては、海底形状の起伏造成及び維持安定をねらいとして、従来の規格礁に可塑性資材を附加し、造成量も考慮して設置したが、5～3ヶ年経過後の状況は、ネット・ロープ等の附加資材の波浪による流失が著しく、単独礁以外は礁の一部を残すに止った。また、礁規格による差異は、高さ、重量、接地部面積に比列して、埋没、盆状洗掘を呈し、表一礁№2、5を除き、ほぼ安定する。

(3) 附着蛸集生物

附着生物は、フジツボ、イガイ類等が優占し、極相を呈する礁も認められるが、藻類では、モク、クロメ類の着生が礁頂部に敬見される程度に止った。

蛸集生物の季別推移を量的に把握するため、礁№6十字礁域で定還納による漁獲試験を実施したが(5～8日)、入納結果は、時期、地域差によるためか、ヒラメ、ウマヅラハギに次いで、アトウダイ、ケンサキイカの漁種変動が見られ、25種に及んだが、日中の潜水観察結果とは異なった。

試験施設及び場所

試験場所	水深	設置年次	No.	構築物名	規格	数量
岩美町 牧谷地先	15~20 ^m	47	1	コンクリート・ブロック	1.3m角	25個
		49	2	異型ブロック(ネット付)	0.5t	3式
		〃	3	中空三角ブロック	3t	15個
		50	4	中空三角ブロック	1t	8個
		〃	5	三段横ヒューム管	1t	9基
岩美町 船磯地先	15	49~52	6	十字礁	1.1.8t	16基

5. ズワイガニ増殖技術開発試験

目的：日本海におけるズワイガニ資源の増殖を図るため、ズワイガニの浮遊期幼生及び稚ガニの分布、生態の究明を行い、人工種苗放流方式を検討する。

結果：昭和52年5月、6月はズワイガニ属として採集物を査定し、昭和53年3月はズワイガニとベニズワイを分離して査定した。

5月：23定点中ゾエア1期は1定点で1尾、ゾエア2期は1定点で1尾、メガロパは3定点で16尾採集され、採集層はいずれも0m層である。

6月：ズワイガニ属浮遊期幼生は全く採集されなかった。

3月：12定点中ゾエア1期は8定点で117尾、ゾエア2期は3定点で9尾が採集された。

水深別ではゾエア1期が25m層で7定点から101尾、50m層から2定点10尾、

100m層から1定点で6尾採集された。ゾエア2期は25m層から2定点で2尾、5

0m層から2定点で2尾、100m層から2定点で5尾採集された。

6. 魚類種苗生産技術試験(ヒラメ)

ヒラメ種苗の量産化技術の確立を図るために、昭和50年11月18日から屋根付き水槽で飼育中の親魚からの採卵・受精・ふ化、4.2トンコンクリート水槽によるふ化仔魚の密度別飼育及び餌料に関する若干の試験を行った。

室内水槽における自然産卵について：雌親魚4尾(全長6.05~7.15cm)、雄親魚8尾(全長5.00~7.25cm)の計により、昭和52年3月16日(水温14.5℃)~6月29日(水温21.4℃)の106日間に78日産卵がみられた。雌親魚1尾の平均産卵回数は19.5回であり、ヒラメは多回産卵魚であることが明らかになった。産卵時刻は0~6時の間に $\frac{2}{3}$ の産卵がみられた。総産卵数は16,171,700粒であり、雌親魚1尾の平均産卵数は4,042,925粒であった。また産卵盛期は3月下旬~4月下旬の40日であった。ふ化率は1日の産卵数が多い時に高

い傾向を示し、産卵期の前半が79.8%と高く、後半は35.0%と低かった。産卵期を通算したふ化率は75.9%であった。

4.2トンコンクリート水槽による仔稚魚の密度別飼育：4.2トンコンクリート水槽4面を用い、50,000尾-2面、75,000尾-1面、100,000尾-1面の計275,000尾のふ化仔魚を36~38日間飼育し、114,042尾の着底稚魚を得た(大きさ11.3~15.6mm)。歩留りは92.92%~75.5%の範囲であり、収容密度が底い程高い歩留りであった。

生産した稚魚のうち91,859尾(平均13.48mm)を放流種苗としてヒラメ大規模増殖場へ放流した。

仔稚魚の飼育にチグリオバス及び配合餌料を用いた場合の給餌時期の違いによる餌料効果について：チグリオバス及び配合餌料ともに平均全長10.5mm以上の大きさから給餌をはじめれば変態を完了した稚魚が得られた。歩留りにワムシ、アルテミア区(コントロール)が最もよく、次いで配合餌料区、チグリオバス区の順であり、チグリオバス、配合餌料ともアルテミアの一部代替として使用できるものと考えられた。

7. 貝類種苗生産技術試験

浅海域に生息する有用貝類の放流用種苗としての生産技術の開発研究をおこなった。

(1) クロアワビ

母見養成・早期採卵を考え、3月より母貝を水温20~26℃に保ち塩ワカメ、生ワカメ、クロメを餌に養成し、9月にほとんどの個体が熟度3に成熟した。

採卵・産卵誘発は800mwh/lの紫外線照射海水を注水し、養成母貝より9月29日に1,010万粒採卵し、反応個体の割合は8割であった。

又、徳島産母貝から10月11日~10月31日に3回採卵し2,366万粒を得た。受精率は40~89%であった。

前期稚貝飼育(波板飼育)採苗はカキ研方式でおこない、波板(35×35、40×60cm)1板当たり幼生を1,000個あて付着させ、2トンコンクリート水槽で飼育し、3日平均殻長4mm稚貝を29,473個生産し、単位生産量は1,152~5,974ヶ/m²、平均2,799個であった。

後期稚貝飼育・波板離脱後は人工餌料を餌に、2トンコンクリート水槽中に目合4mmのモジ網イケス(50×55×20cm)を座下し、収容飼育し、放流サイズの平均殻長15mm(6~38mm)を16,546個、単位面積当たり2,068ヶ/m²の生産であった。

(2) サザエ

9月中旬~10月中旬に、干出温度刺激により4回採卵し550万粒を得た。受精率は88~95%であった。

波板付着稚貝は、2トンのコンクリート水槽で飼育し、3月下旬で2~4mm稚貝4,000個、

単位面積当り2,000個/m²の生産であった。

(3) トリガイ

11月下旬に800mwh/ℓの紫外線照射海水を注水し産卵誘発させ、700～1,000万粒/個を採卵し、個体反応割合は $\frac{3}{4}$ であった。

8. 初期餌料培養試験

魚貝類、甲殻類等種苗生産に必要な初期餌料の大量培養の基礎技術試験を行った。

チグリオバスター1.0トンパンライト水槽を用いて海水濃度及び水温の違いが増殖に及ぼす影響を検討した結果、海水濃度25%、水温20℃で最大密度5,000尾/ℓ前後が得られた。

50t水槽では海水濃度50%、水温15～18℃の条件下で1,000尾/ℓ前後を得るにとどまった。

9. 内水面増殖試験

養殖技術試験

アユ種苗生産業者の技術指導及び魚病、寄生虫等の防除等について養殖業者の技術指導を行った。

アユの増殖試験結果表

試験項目	試験内容	結果
海水濃度	25%	5,000尾/ℓ前後
海水濃度	50%	1,000尾/ℓ前後
水温	20℃	5,000尾/ℓ前後
水温	15℃	1,000尾/ℓ前後
水温	18℃	1,000尾/ℓ前後